北海道教育大学学術リポジトリ
Hokkaido University of Education Repository
国立大学法人 北海道教育大学
HOKKAIDO UNIVERSITY OF EDUCATION

北海道の美術教育の礎に関する考察(2)：伊藤恵の教育的視座について

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2017-09-19
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 阿部, 宏行
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00006575

北海道教育大学紀要（教育科学編）第68巻　第１号
Journal of Hokkaido University of Education（Education）Vol. 68, No.1
平成29年８月
August, 2017

北海道の美術教育の礎に関する考察(2)

～伊藤恵の教育的視座について～

阿　部　宏　行

北海道教育大学岩見沢校美術教育研究室

A study of Art Education in Hokkaido (2)

～ The achievement of Satoshi Ito in education ～

ABE Hiroyuki

Department of Art Education, Iwamizawa Campus, Hokkaido University of Education

概　要

本稿では，戦後北海道の図画工作・美術に関する造形教育の指導の礎を築いた伊藤恵の軌跡をたどる。伊藤の紙工作をはじめ，その独自な指導を記録した書籍等を整理するとともに，随筆などを参照して彼の教育や研究の在り方を考察する。

１　はじめに

戦後北海道の図画工作・美術に関する造形教育の指導の礎を築いた伊藤恵の軌跡をたどる。伊藤恵は大正８年に富山県西波郡石動町に生まれすぐに渡道している。藤野高常[*1)]に札幌師範学校本科第一部で薫陶を受け，昭和14年に札幌市大通尋常小学校に赴任した。その後昭和22年北海道第一師範付属小学校に転任し，昭和39年に札幌市立東園小学校，昭和43年に札幌市立羊丘小学校，昭和48年に札幌市立東山小学校に在職している。

教職時代は，現在の北海道造形教育連盟の設立にもかかわり，造形教育の指導のあり方を学ぶ後人に多くの影響を与えた。

２　研究の目的

本研究では，伊藤が戦後の造形教育に関する業績として，主なものとして「紙工作」の指導を取り上げている。その中には，幾何学模様の展開や展開図のいらない紙工作などの研究に関すること，また，図画工作の指導に関する随筆を多く執筆し「読ませる」「考えさせる」指導を誌上から行った。これら伊藤恵の業績を詳らかにすることで，今後の図画工作の指導また研究の一助とすることを目的として論述する。

伊藤恵は大正８年に富山県西波郡石動町に生まれすぐに渡道している。父親が巡査であったことから，北海道内を親の転勤に伴って転校も多く小

学校６年間で４校に在籍したと，随想冊子『敬老パス』(1992年)の「恩師」の項に記載されている。

渡道のあと大正15年真谷地尋常高等小学校（夕張）に入学し，１年の２学期に豊水尋常高等小学校（札幌）に転校した。その後，２年生の１学期に札幌の幌西尋常小学校に転校し，６年生の５月に苫小牧東尋常高等小学校に移り，卒業まで在籍し，高等科で２年を過ごして，昭和９年３月に卒業した。その後札幌師範学校本科第一部を卒業し，昭和14年に札幌市大通尋常小学校に赴任し，教職人生を歩むことになった。

図１） 伊藤恵(80歳）1998年７月自宅にて筆者撮影

本稿は，伊藤恵の研究や仕事に特化して，その業績を後世につなぐ役割を担うこととする。

その構成は第１．紙工作の研究，第２．図案と幾何学研究，第３．図画工作の指導研究，第４．随筆による研究で構成し論を進めていく。

３　紙工作の研究

⑴　展開図のいらない紙工作

伊藤は自ら紙で立体物をつくり公募展などにも出品している。作品をつくる過程で「展開図のいらない紙工作」を考案することになる。

小冊子『かくれ展開図　―展開図のいらない話』では，展開図に関する私見を含蓄のある話で記述している。

「紙工作と言えば展開図，自分で描ける展開図と言えば箱で箱以外に物を作るとなれば展開図のあるもの以外はダメという時代が随分長く続きました。長い紙工作の『箱づめ』時代でした。それはすべて展開図の発明のせいだと言えないでしょうか。」と，紙工作と展開図が同質・同一化を生み出して，固定的な既成概念になって，新たなものを発見・発明などの創造的な活動を規制しているという。

図２） 第39回全道造形教育研究大会（帯広大会）にて実技研修の講師　1989年７月（「創造の大地」北海道造形教育連盟40周年記念誌から1991年発刊）

創造性の育成を標榜する図画工作・美術において展開図に縛られ，自由な発想を規制させてはいけないという思いから伊藤は試行錯誤を繰り返しながら「立体作品を切り開く」という発想に至った。これが原点となって，様々な紙工作の道を開くこととなった。

⑵　にぎりめし

展開図を用いない紙工作において，伊藤の初期の指導に用いているのが「にぎりめし」である。

図３は，札幌幼児保育専門学校において，平成11年（1999年）にテキストとして使用した貼り合わせ立体の「にぎりめし」の授業である。

紙を２枚重ねて切ることで，その円周の長さが２枚とも同じことを利用し，ゴム系接着剤を用いた「のりしろ」のいらない紙立体をつくる授業である。(紙立体とは，伊藤が名付けた名称である。)

図３）「にぎりめし」平成11年２月「紙工作テキスト」1999年発刊

この「にぎりめし」はゴム系接着剤の特性を生かし，両方の紙の縁に着けた接着剤が半乾きの状態のものを交差させた形で少しずつ着けるので，子どもにも容易にできることが特長である。

この貼り合わせ立体の「にぎりめし」を土台として形成し，目鼻などの部分や飾りをつけ顔にした作品群が平成７年の小冊子『紙立体「顔」の表現について』(1999年)に掲載されている。(図４)

この小冊子は単なる作品紹介ではなく，4177点に及ぶ作品の写真から検証考察したものである。作品の内訳は，昭和34年から38年及び58年の（５年と１年）の北海道教育大学附属札幌小学校の児童作品219点，昭和47年から昭和55年（７か年）の札幌市立東山小学校児童作品831点，昭和58年から平成３年（８か年）の札幌幼児保育専門学校生徒作品683点, 昭和59年から平成２年（７か年）の栄養短期大学学生作品675点，そして，昭和56年から平成５年（13か年）の北海道教育大学学生作品1769点からなる合計4177点の分析である。小学校から大学生に至る幅広い対象の「顔」を構成している目や鼻，口といった部分の表現方法の工夫を作品の写真から立体や半立体などで分類し考察を加えている。(図４)

図４）紙立体「顔」の表現について

作品の傾向を一つずつ記録し，表にまとめるなど丹念に調査している。小学生から大学生までの幅広い年齢層を調査対象としているところが稀有な調査である。

４　図案と幾何学研究

⑴　正多角形の敷き詰め

正方形や正五角形など単一であれば，それだけの形であるが, 並べ方や敷き詰め方を工夫すると，新たな形が生まれることを伊藤は様々な形を用いて試し, その規則性や汎用性を見つけ出している。

例えば,「正方形ばりによる正三角形づくり」では, 正方形の３枚の頂点が合うように並べると，その隙間に正三角形ができる。外側になる１枚の正方形に同じ大きさの正方形２枚を並べていくと，また，そこに正三角形の隙間ができる。それを繰り返していくと，そこに正六角形の隙間が現れるという関係性を見いだしてくる。その上，外側には正十二角形が生まれている。(図５)

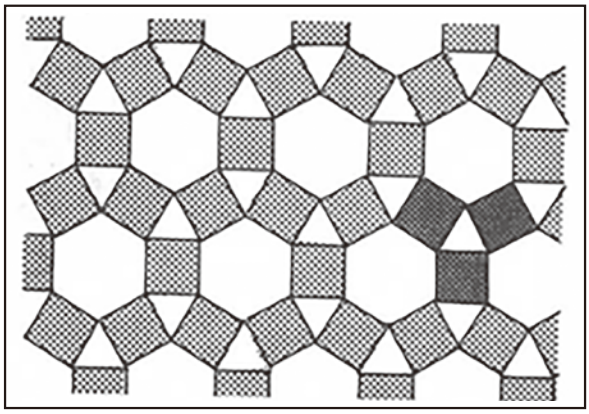

図５）正方形のこと（「玖馬先生の四季」から）

正方形がさらに正五角形，正六角形と発展する中で伊藤は, 規則性とならんで,「幾何的な美しさ」を見出している。これが手で考え，つくることの意味といえる。結果だけではない，図画工作・美術の本質的な「新しい意味や価値をつくりだす」ことへの追究である。

⑵　展開図へのこだわり

伊藤の展開図に関する強い関心は，師範学校２年（昭和11年）に思い付いた荒けずりの木彫りの『ひぐま』からの着想であった。これは，剥いたリンゴの皮をホチキスで綴じ合わすと元の立体のリンゴの状態になる。つまり，リンゴの皮は展開

図であるという考えに則っている。また，この展開図を実際の立体に仕上げる「技能」については，苫小牧東尋常小学校高等科（現在の中学校１・２年に相当する）で，算術の時間につくった正四面体や正十二面体などの「立体幾何模型」が興味のはじまりと記述している。

リンゴの皮のように荒削りの「ひぐま」の背を一つずつこすりだし，「展開図」を作成し組み立てると「紙立体」が出来上がるのでないかと考えたという。その上で，試作を続ける経験が新たなものをつくりだすという創造的な態度が身に付いたと回顧している。それは，誰かがつくった展開図を手順に沿って作るという模倣では意味がないという。伊藤は，「創造性の育成」の指導につながると記述している。

投影図から展開図を作って組み立てるという方法に限界を感じた伊藤は，「展開図は，投影図なしではできないか。人形の形をつくって，そのできた立体を切り開いた形が展開図になるのでないか」という発想の転換を図ることになる。

この時の思い付き（着想）を「思いつきは，いつも思いつめたときに生まれる。現状について，それではいけないという悩みの中から生まれる。悩みぬいた挙句，あたかも，とつぜんのようにやってくる。当の本人さえ予想しない形でやってくる。」[*2)]と述べている。

翻って「指導者」として，学習で子どもと対峙する場面にも出会うことがあるという。「指導者側になど，わかろうはずはないのである。それでいて，（子どもの）以前の経験が，不思議と関係しているものである。」（下線筆者）としている。経験から裏付けられた「知識」と「感性」との出会いのような関係を記述している。

⑶　並べること　敷き詰めてわかること

小冊子『紙立体を考える／補遺２　正５角形をならべる』(1980年)では，正五角形を並べている。この場合は，同じように敷き詰める場合と重ねる場合も試して考察を加えている。（図６）

同一の大きさの正○角形をどのように並べるかによって，隙間の形が規則性をもって生まれてくる。角の数で正○角形となるが，凸凹の形に着目すると「星形」などの「かわり正○角形」が生じるということである。この小冊子には，正三角形から正二十角形に至るまでの形の並べ方と，並べてできる隙間の形の図版が，謄写版印刷で彩られている。表紙の正十五角形の１点中心は，30個の正十五角形が交錯して，外側に正三十角形をつくっている。

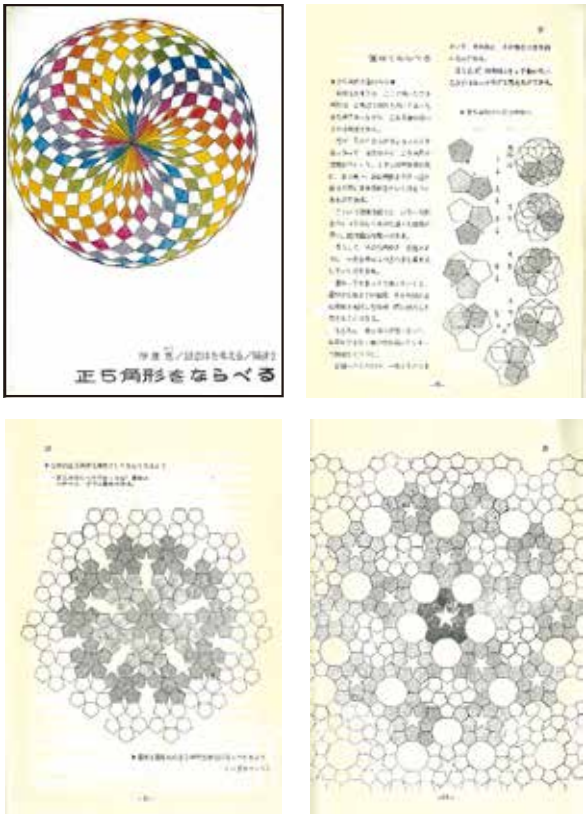

図６）「正５角形をならべる」の表紙と本文

５　図画工作の指導研究

⑴　授業を司る教師の苦難

伊藤の著書『玖馬先生の四季』には，教師としての苦悩と工夫が随筆のように書かれている。例えば，「着手の恐怖」と題した項目がある。

これは図画工作の絵の授業で「先生，かいてもいいですか？」という子どもの素朴な問いかけに対する苦心の様を記述している。

子どもに主体性を望みながらも，教師側には，

作品の完成形を思い描いている。子どもに指示・説明するとき，どこまで説明して「かきなさい」という言葉を発するかの苦心であり，教師に同意を求める子どもに対して「自分で考えて決めなさい」としながらも，放任になっていないかの苦心である。

自らの背離的な状況に苦心する教師の心の動きである。指示・説明することで，教師の思い描いたものに近い作品が出来上がるが，それは指示ではなく「命令」ではないかと悩むのである。

図7）著書「玖馬先生の四季」の表紙　装丁　伊藤さとし

子どもの「かいていいですか？」という習慣は，明治５年の学校制度の始まりから，一般化し習慣化されたと考えられる。教師の「手をおいて，こちらをむきなさい」という注視させる言葉と「用意，はじめ」という号令での始まりである。

学習効率から考えると極めて合理的であるといえるが，子どもにとっては，「先生がよしという前に始めたら叱られる」という不安感も恐怖感もある。その回避を考えての「もう，かいていい？」という連なりの言葉になる。

教師にとっては，説明も聞かず，指示通りにしない子どもの絵や作品などは「失敗」するという思いがあるため，回りくどい長い説明に時間が費やされる。

伊藤の自戒を込めた実践では，「ろくに説明を聞かずにはじめた子供たちの作品は，意外にも的外れではなかった。」と記述している。

「わからないことは失敗する」という，一見当たり前の原理が，遠慮がちな小さな紳士（子どものこと）たちの前で，遠慮がちに否定されたが，その否定にも関わらず，しつこく初心を貫こうとする度重なる指導が「着手の恐怖」を植え付けていると懐柔している。「先生，かいてもいい？」は，教師の指導によって植え付けているのではないかと警鐘を鳴らしている。

伊藤は，「わからないうちに始めたら失敗する」ということが覆される理由を考察している。

「いったい，一度も学習していなければ，わかるはずもないという判断は，子どものしぜんな成長を無視する暴論である」[*3)]と述べながら「反対に，ほんとうにわからない者に，通りいっぺんの説明や図示程度で，わかるであろうという判断もまた，誤りというべきである」と，その両面から考察している。

その上で「着手」の機会について伊藤は「そのわからない子どもについて，むしろ実際に着手し，失敗もした上でなければ納得いかない場合がある」として着手の機会を取り上げることで，その子どもの学びにならないことがあるという。

いたずらに失敗を恐れて，説明をくどくどとサービスするのは，子どもにとってはなはだ迷惑なこととしている。若い教師の陥りやすい，具体的な例として「着手」をあげて記述しているのである。自戒を込めて伊藤は「二十年生きて得た結論を，十才の子どもたちに教え込むために，学習の中から失敗と実験とを追い出そうとしていた。」と反省している。

伊藤は，指導において「着手の時期」を引き合いにしながら，図画工作において，手で考えることで分かり直しをすることや，生活経験などあらゆる場で知り得たことを知識としながら学習の場に「半知」の状態で臨んでいることを無視して，教師の「説明・指示」の度合いによって加速されるという盲信を憂いている。

伊藤は「その思い過ごしたすべての部分を取り払ってみると『着手の保留』は，意外にも時間の無駄遣いによって，引き延ばしを図るという悲しむべき無意識の願望のなせるわざに過ぎなかった。」と続けている。

⑵　手で考える　失敗を大切にする

学校教育が今手放そうとしている人生にとって必要不可欠な「実験と失敗」を鋭く指摘している。今の学校教育の中に「失敗」も許す教科はどれだけあるだろうか。

私たちは「失敗」が私たちの成長にどれだけ大切かを知っている。その中でも図画工作は,「失敗」も大切に考えている教科といえる。造形活動の全過程を通して，自分の思い付いたことや考えたことを試みようと手で考える教科である。立ち止まって考え直したり，違う方法で試みたりするというように，人生の様々な場面で起こり得ることを学習しているといえる。

宮坂元裕は「学校教育では，子供が何かを考えたとき，やってみてわかること（これがわかることである）を大事にする。しかし，子供のすることはだいたい失敗し，その失敗から学ぶことが多い。学校教育は失敗することに意味を見出しているのである。」[*4)]として，失敗の大切さを述べている。

特に図画工作の造形遊びは，思い付いたことを「試す」といった造形的な実験の場である。子どもは，つくり，つくりかえるという場で「いいこと思い付いた」とつぶやきながら造形活動を繰り返す。試行錯誤ではなく，発見と思考が繰り返される「試行と思考の連続の場」といえる。また，宮坂は，O・ルーブル著「学ぶとは何か」から，一節を引きながら学校を「社会生活への準備の場，失敗してもやり直しのできる場」として位置付けている。

⑶　子ども理解と教師の働きかけ

教師は，子どもの思いなどを汲み取りながら授業を展開する。授業を司る教師にとって，展開と子どもの思いの把握は，教師の力量形成に重要な能力である。

多くの授業の場合，教師はある見通しをもって意図的に子どもの意識を向けようとする。子どもの側というと，自分だけの思いと経験をもとに授業に参加し，教師の働きかけに応じようとしている。特に，低学年の子どもは，自分の思いに多くの意識が向いている。

子どもの意識（理解や経験）と，子どもの意識を向けようとする教師の働きかけが，教師の予想と同じであれば一般に，指導の効果が上がったよい授業として評価される。

反対に，教師の予想と，子どもの思いにずれがあった場合，指導効果が見られないとして，教師の力量や，構成している子どものせいにされてしまうことがある。

授業の多くは，様々な要因によって予想と異なったりして,意外な行き違いを生むことがある。そのような行き違いの中で，発想の広がりや深まりが生まれることがある。それが前述の紙立体を切り開くことで展開図ができるという着想が生まれたのである。「ひらめき」は突然降ってくように起きるのである。

６　随筆で語る研究

⑴　ガリ版（謄写印刷）と教師

通称ガリ版による小冊子は，コピー機などの機械化が進む前の学校生活においては欠くことのできない必需品であった。学習用テキストや通知文，挨拶文，文集や表紙など，学校生活のあらゆる用途に使用された。伊藤の小冊子（図８）の表紙のように多色での孔版版画は熟達した技能と技術が必要になる。

それぞれの小冊子は100部程度の発行部数となっている。手作りで仕上げるには日数と手間には計り知れないものがある。

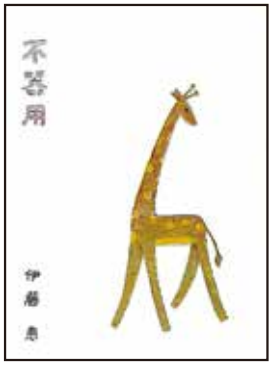

図８） 謄写印刷による小冊子『不器用』1988年

小冊子に掲載された随筆の多くは，家族のこと，日々の出来事などが洒脱なタッチで綴られている。また，老齢を機に，2006年からコピー印刷（2002年まで謄写印刷）に変わったが，手元にある小冊子（1988年～）の表紙や本文は，通称ガリ版（謄写印刷）による手作りである。

内容は多岐に渡っているがその中でも，特筆すべきものに考古学ならぬ考現学的なテーマのものがある。この考現学は，今和次郎の提唱された研究で[*5)]身の回りにある「現在」を調査対象と考えている。その影響を受けた美術家であり思想家の赤瀬川原平らは，その後，路上観察やトマソン[*6･7)]を展開して考現学的な研究を受け継いでいる。

伊藤もまた，随筆小冊子の『続々・採尿譚』には，「チラシ」と題して，朝刊とともに配達される折りこみチラシに関する研究を実施している。その動機について，自らの治療のために読み取った採尿量を記録するため，裏白の折り込みチラシの裏を使うことにした。毎日配達されたチラシの内容を分類した結果パチンコ屋のチラシが裏白であることを発見した。平成11年から平成17年まで配達されるチラシの種別を記録しグラフ化している。土日などに集中するチラシや，景気の動向に影響を受ける業界の趨勢（すうせい）をさらに考察する。また，「採尿」に関する記録をグラフ化し「採尿間隔と一回量の関係図」（平成17年１月から12月）にまとめた。採尿量までも研究対象として表している。

図９） コピー印刷（本文）による小冊子『続々・採尿譚』2006年

⑵　考現学としての研究

『二二七町内控え　一町内の40年』では，町内会長など務めたことから「一人の目で見た町内の様子を書き残す」という一念で書かれたものである。目の前の資料によって何が判るのか，手元の資料を記録化して文書に残すことを発行の理由としている。この小冊子には，東月寒地区の地図やバスの運行表，食品関係の店とチラシの枚数など，独特な視点で町内の様子を伝えている。

図10） コピー印刷（本文）による小冊子『二二七町内控え』2002年

研究者の中には，仮説を立てて，都合のよいデータを集めて，論を組み立て検証している例もあるが伊藤は，演繹的に仮説をつくらず「あるがままを受け入れ」帰納法的に積み上げて，データから共通項を見出し，論を構成している。どのような対象も「研究する」ということの意味や価値を示している。その調査する内容に，優劣や利用価値など目先のものに惑わされない教育者と研究者の気質が感じられる。

⑶　随筆から

ここでは伊藤が書いた小冊子の随筆から紙工作に関わるものや人柄を表すものを選んで掲載する。

①題「紙立体」

小冊子『不器用』（1988年）には，紙工作の分野で，自ら名付けた「紙立体」のことを記述している。

「『紙立体』は，ぼくが紙工作につけた呼び名である。それが主として「立体」に関わっているからである。展開図なしで，いきなり立体を作るといえば，余程難しいことのように聞こえるかも

知れないが，じつは，それがぼくの『不器用かくし』でもある。」と書き始めて，紙立体をつくるため貼り合わせるのりしろの「誤差」に言及する「つまり，誤差は『誤差』という程度を超えてはならないのである。展開図がいらないわけではない。作れるものならあった方がいいくらいである。だが，図には正確さが求められるにも関わらず，とくに子ども達には不向きなのである。定規やコンパスに不慣れの子ども達にとって『正確ほど不気味なものはない』のである。」として，展開図や設計図などに負担がかかりすぎると，子どもの表現意欲は低下し，「つくること」そのものにまで負担が及ぶのである。

②題「のりしろ」

小冊子『Kさん閑居　オルガンほか』(1996年)には,「のりしろ」と題する随筆が掲載されている。これまで紙立体に「のりしろ」は不要であることを唱えていたが「のりしろ」の別の意義を見付けて記述しているのである。

「『のりしろ』の折り目が，そのベコベコ（接着面が凹凸を生むこと）を防ぐのである。『のりしろ』には接着面積を拡げる役目のほかに，その折り目で『直線を維持する』役目があったのだ。これまでにも『紙の折り目』が紙の面を補強に役立つことをKさん（伊藤のこと）は知っていた。しかし，その同じ働きが『のりしろ』にあったとは気づかなかった。気づかないくせに，不遜にも『のりしろ』はいらないと言いはった。Kさんは自分自身のあさはかさに愕然する。」

紙工作など多くの教材研究を重ねて，自ら得た知識や概念を思い込みではないかと再検討する姿勢を見ることができる。

③題「接着剤」

小冊子『Kさん閑居　「霧」ほか』には，紙立体に欠かすことのできないゴム系接着剤について記述している。

「ほかのノリで『片側だけに塗っていた』のをゴム系ノリでは『両方に塗る』のである。つまりA面のA線と，B面のB線の両方に塗るのである。つぎに，他のノリでは『乾かないうちに着ける』が，ゴム系ノリでは『半乾き』を待って着ける。『半乾き』はつまり二，三分待って着けるのである。ほかのノリのように『押えて待つ』必要はなく『軽く押える』だけで着いてしまう。すぐに着くから，うっかり位置合わせを間違うわけにはいかない。『確り押さえる』必要がない代わりである。」と，ゴム系接着剤の特性を軽妙に説明している。伊藤の用具に関する技術や技能について，教材研究から得られた知を随筆にしてわかりやすく説明する。

④題「藤」

小冊子『Kさんの閑居　傘寿』(1999年)には「藤」と題する随筆が掲載されている。

「付属小学校の藤の花がKさんの庭に咲いた。正確に言うと，付属小学校の庭の藤の種を植えたら，花をつけた。昨年二房咲いた藤の花が，今年は健気にも十房ほども咲いた。（中略）Kさんの藤は，出る蔓，出る蔓，ことごとくを切られながら，それでもこうして咲いてくれた。呆れたシンの強さである。付属の先人の心に適(かな)ったのは，案外，それであったかもしれない。」

この種を旧職員としていた伊藤に渡したのは，筆者であった。

おわりに

随筆においても，随所に伊藤の洒脱で，英知に溢れた持ち味を感じることができる。

展開図を必要としない紙立体は，重ねた紙を楕円形に切り，交差するように接着することで「にぎりめし」のような立体ができる。これは，小学生や工作などを不得手とする大人でも，つくる喜びと，発展して「顔」にするなど，自分なりの工夫ができるので，教材としての価値が高い。また，敷き詰めや並べ方による工夫によって新たな美しさを生み出す正五角形など幾何学など数学的な学びにもつながっている。

随筆は，ガリ版による謄写印刷の技術とともに，手書き，手作りのよさを生み出している。随筆の内容は，どのようなところからも見出すことのできる視点や，読み手の気持ちに添うような文体は流麗である。具体的な場面が想像できることも特徴といえる。

本稿において伊藤の戦後の図画工作・美術に関する軌跡を記述してきた。

教師個人としての生き方のみならず，研究者として，学ぶことの多い生き方であったといえる。これら伊藤の業績が後世に引き継がれ，図画工作・美術の指導の発展充実に寄与するものとなることを祈念している。

追　記

北海道造形教育連盟の発足に関することについては，北海道教育大学紀要「北海道の美術教育の礎に関する一考察　～藤野高常の教育的視座について～（教育科学編）第63巻第１号pp.1-12」に藤野高常の教え子として，教科書や北海道教育史の編纂などにも数多くかかわっていたことを記述している。当時，伊藤は，以下の北海道独自の教科書『北海道図工の学習』の編纂にもかかわり自作の模型などを掲載している。

（北海道図画工作連盟『北海道図工の学習』北海道教育評論社　３年，４年　表紙　1954　※この準教科書は北海道教育大学岩見沢校図書館に１冊ずつ現存するのみとなっている。）

参考にした伊藤恵の書籍は以下の通りである。

【「紙立体を考える」シリーズ】

1980年『紙立体を考える／補遺２　正５角形をならべる』昭和55年10月１日　非売品　文・謄写印刷・製本　伊藤恵

1984年『紙立体を考える／補遺３　かわり正７角形』昭和59年４月25日　非売品（150部）文・謄写印刷・製本　伊藤恵

1995年『紙立体「顔」の表現について』平成７年７月７日　調査　伊藤恵

1995年『繰り返す　－開いて蕾む「花」について』平成７年10月15日　文・図版・コピー・製本　伊藤恵

1996年『ねじれ立体』平成８年４月16日　非売品　文・図版・コピー・製本　伊藤恵

1997年『かくれ展開図　－展開図のいらない話』平成９年４月16日　非売品　文・図版・コピー・製本　伊藤恵

1999年『パクパクの表（斜め折りの改題）－動く紙おもちゃ』平成10年５月20日（20部）／２版同６月20日（30

部）／改題改訂版平成11年３月３日（30部）非売品
文・図版・コピー・製本　伊藤恵
1999年『紙工作テキスト　－札幌幼児保育専門学校』平成11年２月１日　伊藤恵

【随筆小冊子シリーズ】

1988年『不器用』昭和63年４月16日　非売品（120部）文・謄写印刷・製本　伊藤恵
1990年『さやちゃん』平成２年６月30日　非売品（100部）文・謄写印刷・製本　伊藤恵
1992年『むかし』平成４年２月２日　非売品（100部）文・謄写印刷・製本　伊藤恵
1992年『Ｋさん閑居　傘寿』平成11年７月30日　非売品（100部）文・謄写印刷・製本　伊藤恵
1992年『敬老パス』平成４年11月１日　非売品（100部）文・謄写印刷・製本　伊藤恵
1994年『共同制作・Ｋさん閑居』平成６年１月31日　非売品（100部）文・謄写印刷・製本　伊藤恵
1995年『Ｋさん閑居』平成７年５月31日　非売品（100部）文・謄写印刷・製本　伊藤恵
1997年『Ｋさん閑居　「釘」ほか』平成９年６月10日　非売品（100部）文・謄写印刷・製本　伊藤恵
1996年『Ｋさん閑居　オルガンほか』平成８年５月10日　非売品（100部）文・謄写印刷・製本　伊藤恵
1998年『Ｋさん閑居　「霧」ほか』平成10年７月７日　非売品（100部）文・謄写印刷・製本　伊藤恵
2000年『Ｋさん閑居　万華鏡』平成12年４月16日　非売品（100部）文・謄写印刷・製本　伊藤恵
2002年『二二七町内控え　一町内の40年』平成14年８月10日（80部）地図・文・製本　伊藤恵
2006年『採尿譚』平成18年２月１日　文・コピー・製本　伊藤恵
2006年『続々　採尿譚』平成18年７月10日　非売品（50部）文・コピー・製本　伊藤恵

【その他】

伊藤恵『絵本（やさしい製本）』日本文教出版
日文図画工作科教授用指導資料　8805　昭和63年５月６日（1988年）非売品

註

１）阿部宏行「北海道の美術教育の礎に関する一考察～藤野高常の教育的視座について～」北海道教育大学紀要（教育科学編）第63巻第１号，2012，pp.1-12
２）伊藤さとし『玖馬先生の四季』楡書房，1978，p280
３）伊藤さとし『玖馬先生の四季』楡書房，1978，p253
４）宮坂元裕『「図画工作」という考え方』黎明書房，2016，p62
５）今和次郎『考現学入門』筑摩書房，1987
６）赤瀬川原平『路上観察学入門』ちくま文庫，1993
７）赤瀬川現平『超芸術トマソン』ちくま文庫，1987

（岩見沢校教授）